

Rotary

イマジン
ロータリー

IMAGINE ROTARY



国際ロータリー 第2550地区

宇都宮東ロータリークラブ会報

<http://www.ri2550uerc.gr.jp/>

会 長 加藤 勝郎 幹 事 塚越 淳史 会報・雑誌委員長 関 元明

例会場 宇都宮市大通り2-4-6 ホテルニューイタヤ 例会日 毎週火曜日(12:30~) 事務局 ホテルニューイタヤ内 宇都宮東ロータリークラブ TEL.028-638-5125 FAX:5128

通年3000号 2023年5月23日(雨) 第42回例会 会員数110名

ハイブリッド例会

点 鐘 加藤 勝郎 会長
司 会 副SAA渡辺(純) 会員

- ◇ロータリーソング「我等の生業」
- ◇本日のランチ 小付 煮物 豚ヒレグリルガーリック風味 香の物 汁 御飯



ビジター紹介 細谷副会長

◇来訪ロータリアン

1名(1クラブ) 累計26,612名

宇都宮北RC 佐伯 秀利 様

◇宇都宮市役所 女性相談所

所長 藍原 紀子 様(卓話者)

◇栃木県済生会宇都宮病院

地域連携課長 稲見 一美 様(卓話者)

秋山 綾香 様

大野 咲 様



会長挨拶 加藤 勝郎 会長

皆さん、こんにちは。山本周五郎の小説に『赤ひげ診療譚』があります。300年前の史実をもとに65年前に出版された短編集です。つい最近もNHKテレビドラマで放映されています。300年前も65年前も今でも、赤ひげ先生の、患者に寄り添い無知と貧困に立ち向かうという姿勢に感動します。経済的に豊かになり、スマホで検索すればすぐに情報が得られる現代では、過去の話でしかないと思いがちです。「生理の貧困」という表現を初めて聞いた時、戸惑いを感じました。これは生理や貧困に対する無知、他者へのそして女性への想像力の貧困のことだと気づきました。現代でも、自分や社会の無知と貧困に立ち向かう必要があります。本日の卓話はその手助けになると思います。



幹事報告

塚越 淳史 幹事

- ◇5月20日(土)、宇都宮陽東RCの創立30周年記念式典開催。地区より佐貫ガバナー、三井ガバナーエレクト等、多数の方が出席。当クラブからは加藤会長、塚越幹事が出席。
- ◇5月30日は夜間例会。お間違えなく。
- ◇例会終了後、この会場にて臨時理事会開催。



卓 話

「宇都宮市つながりサポート女性支援事業について」



宇都宮市役所 女性相談所 所長 藍原紀子様
皆さん、こんにちは。宇都宮東ロータリークラブの皆様には、昨年度に引き続き、「宇都宮市つながりサポート女性支援事業」に多大なるご厚意をいただきまして誠にありがとうございます。はじめに私の方から宇都宮市の女性相談の状況をご説明させていただき、その後、本事業の受託者であります済生会宇都宮病院の稲見課長より事業の実施内容についてご説明させていただきます。

宇都宮市女性相談所では、火曜日から土曜日まで、女性の相談員4人態勢で電話や面談により、主に離婚問題や家族関係、自己自身の生き方等の相談をお受けしています。年間の相談件数は、コロナ以前は2,500件前後で推移していましたが、令和4年度には約2,900件と、コロナ後の相談件

数は2割近く増加しています。新型コロナウイルス感染症の拡大は、厳しい雇用環境や家事育児の負担増など、特に女性への影響が深刻で、本市を含め、全国的に自殺者の急増が問題となりました。コロナの影響で不安や困難を抱える女性の孤立、潜在化が懸念されておりましたことから、本市におきましては、支援が十分に行き届いていない女性に対し、令和3年度から生理の貧困への対応や相談支援体制等の強化を図るため、生理用品の提供等をきっかけとして相談につなげる、「つながりサポート女性支援事業」を開始したところであり、事業展開にあたりましては、市民に身近な地域で支援を行うNPO等の知見やネットワークによる相談支援体制を強化し、必要な支援につなげていくため、地域の基幹病院として長年宇都宮市の地域医療の充実に寄与いただいております済生会宇都宮病院に委託して実施していただいております。当病院では、女性の心情に寄り添い、悩みの解決に結びつく相談が出来るよう、社会福祉士、精神保健福祉士等、専門的知識を有する相談員を配置し、十分な体制で業務を適切に遂行していただいているところでございます。

済生会宇都宮病院 地域連携課長 稲見一美様



皆様、こんにちは。私からはつながりサポート助成支援の活動内容についてお話いたします。

- パワーポイント・配布資料にて説明 -

私は、社会福祉士、精神保健福祉士、公認心理師の資格を持って、病院の中で様々な相談業務を担っています。皆様からいただいた生理用品ですが、つながりサポート相談専用の袋に入れて、女性に一つ一つ手渡しでお渡ししているところです。ご寄付、ありがとうございます。

はじめに、済生会について少し触れたいと思います。済生会は全国40都道府県にあり、職員数は約64,000人、日本最大規模の社会福祉法人です。明治44年に明治天皇が医療によって生活困窮者を救済しようと設立された法人で、医療、保健、福祉活動を展開しています。

済生会が目指すのは、誰も排除されない「まち」です。「医療と福祉を切れ目なくつなぐ」「最新の医療で地域に貢献する」という役割があります。そして、ソーシャルインクルージョンという

考え：社会的に弱い立場にある人々を含むすべての人を地域社会で受け入れ共に生きていく、という理念のもと活動しています。こういった取り組みにより、令和3年に岸田内閣総理大臣より、第5回ジャパンSDGsアワードを受賞致しました。社会福祉法人としては初の受賞となります。明治44年より、「済生勅語」の精神が脈々と受け継がれ、「施薬救療」の理念にもとづく無料低額診療事業や、生活困窮者の自立支援事業(通称「なでしこプラン」)がおこなわれ、こうしたことが「つながりサポート支援」のベースとなっております。

コロナ禍になり、令和2年8月頃から、若い方たちの自殺者数が増加いたしました。済生会でも全国と変わらず、若い方の自殺の搬送が増えておりました。「何か出来ることはないのか?」ということで、緊急的に学生を救いたいという思いから、フードバンクのNPO団体と協働して、食料品を配布しつつ、困り事、悩み事を拾い上げる相談会を実施しました。私たちの他に、市内に拠点を持つ病院のソーシャルワーカー、宇都宮市社会福祉協議会、保健所等、官民連携で実施しました。院内職員からも食品寄付等の協力もありました。あくまでも食料品の配布が目的ではなく、それをきっかけに困り事を拾い上げ、相談窓口の案内や相談機関につなげるのが目的です。自殺という選択肢を選ぶ前に支援につなげていきたいという思いでの活動でした。そんな中、令和3年の4月頃、NHKで「生理の貧困」というニュースが流れ、「生理の貧困」の問題が可視化されました。困った時に何にお金を使うかという、食べることが最優先で、生理用品は後回しという女性が非常に多くいると聞きました。なんとかできないかということで、食料品を配る活動の中で、生理用品もいち早くお配りさせていただきました。

その活動をしていく中で、宇都宮市の「つながりサポート女性支援事業(つなサポ)」を受託することになりました。コロナ禍において女性は、非正規雇用で働く割合が非常に高いこともあり、経済的な打撃を非常に受けたといわれています。また、行動自粛などでDVや虐待の問題も増えました。家事や介護での辛い状況を誰にも相談できずに、一人で抱え込んで苦しい思いをされている方を、行政だけでは支援に結びつけていくことが難しくなっている状況がありました。つなサポによって、社会との絆、つながりが回復できるようにということで活動させていただいています。

つなサポは、「専門相談の実施(なんでも相談)」「生理用品の無料配布」そして「NPO等との連携(相談窓口のネットワーク化)」の3つの柱を中心に活動してまいりました。まず、「専門相談の実施」ですが、済生会の中に常設の相談窓口を設

け、専用ダイヤルによる電話相談も対応しています。その他、写真はベルモールで相談会をした時のものですが、積極的に地域に出向いて、生理用品を配りながら、困り事を抱えていないか、悩んでいないかを拾い上げる活動、アウトリーチ支援を行っています。昨年度の相談ですが、当院窓口では、無職やパート、アルバイトといった経済的に不安定な方が多いように思います。出張相談会は、ベルモール、ろまんちっく村、ハローワークなどに出向き、13回行いました。子育て世代の相談が多く、主訴としては、生活困窮の問題や孤立、孤独についてで、誰にも相談できずようやくお話ができた、という方がいらっしゃいます。ただ、活動していると「相談するって難しい」と感じます。「相談するまでに3か月かかりました」という方もいらっしゃいます。相談すると怒られてしまうのではないかと、自分の努力が足りないから相談してはいけないのではないかと思ひ、なかなか相談できず、最終的には問題が複雑化、複合化している方が多くみられます。

生理用品の無料配布は生理の貧困への取り組みのひとつではありますが、配布をきっかけに、お話を聞かせていただいています。私たちだけで配っていてもなかなか困っている人に届かないということもありますので、地域の中で気軽に生理用品を受け取れるところがあったほうがいい、ということで、NPO等にもお願いして、地域の中に相談窓口を設けていきました。5月1日時点で市内70か所の窓口があります。相談機関ではな

いのですが、何かしらの協力をしたいという団体も含めると、83か所の横の連携ができました。いろいろな関係機関とつながることができて、世代や種別にとらわれない、重層的な連携が実現できたと思います。最初に相談した場所で「専門ではないので、他にいらっしゃいます」という対応をされると、せっかく相談にきててもそこで気力が途絶えてしまいます。つなサポが目指す連携団体には、まずはどんな相談でも受けとめていただいて、そして、重層的な横のつながりがありますので、得意とする分野につないでもらう、こうしたネットワーク化を図っています。

社会保障制度が整備された今日においてもそこからこぼれ落ち、社会から孤立してしまう方がどの地域にもいます。ソーシャルインクルージョン、誰も排除されない「まちづくり」を実現していくことが必要です。それは、済生会や行政だけでは不可能です。地域全体として取り組むこと、皆さん一人一人のお力を貸していただくことが必要だと感じています。地域課題への対応が社会を変える力につながっていくと思っています。済生会がリーダーシップを図って、様々な機関の間のハブとなり、重層的な支援体制、相談の声を上げられやすい地域社会を作っていけたらと思います。つながりあえる思いやりのある優しい社会を目指して、今後も活動を続けて参りたいと思います。済生会宇都宮病院は昨年5月30日をもって創立80周年を迎えました。皆様のご理解、ご協力のもとと感謝しております。